小品「里仁」

澤田雅弘
SAWADA Masahiro

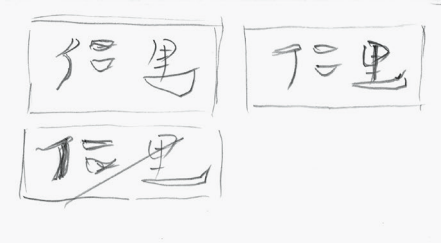
日頃から制作ということばは好まない。といっても、強い反発を抱いているわけではない。しかし、作り込むことはしたくないとの思いを、いつの頃からか抱いて久しい。思いのまま書いて自身の審美に適えばそれでいい。（もちろん至難のことなのだが、）そもそもそういう横着な態度だから、制作過程を記録する気持ちにもなれず、この制作論のページはいつも悩ましい。

今年も夏に五日間、翰墨に親しむだけの日程を確保して、全紙二種、半切幅の小品五種を書いた。どれも事前にラフ程度の目安を立てて臨んだものである。綿密な草稿作りは性に合わないようで、過去には一二度これを試みたことはあったが、紙に臨んだとき草稿に拘束されて気が晴れない。ラフを書くのは、迷いなく臨みたいとの思いと、紙面の見当をたてるためで、書き始めるとラフはすっかり頭から消えている。

仕上げた小品五種のうち、本ページにどれを取り上げようかと考えてたとき、思いが比較的一貫した「里仁」を選ぶことにした。

里仁為美。択不処仁、焉得知。

仁に里（お）るを美と為す（徂徠説）。択びて人に処らずんば、焉んぞ知なるを得ん。



この十一字は『孟子』公孫丑にも「孔子曰」として見えるが、「知」は「智」となっている。残念ながら、定県漢簡に当該箇所は見えず、海昏侯劉賀墓出土漢簡ではどうかも、まだ知らない。

「里仁」二字は『論語』篇名の一でもあり、人口に膾炙するが、管見ではこの二字を書いた先学の作を知らない。その意味ではわたしには新鮮で、ふと書いてみたくなった。簡素な字画だから、西北漢簡のように、思い切って筆を開閉してみようかと思

い、鉛筆のラフでは挿図のとおりに書いて、なんの迷いも無かった。ところが、筆を執ったはじめの一枚を書き終えるか終えないかの段階で、そぐわないとの思いが走った。強烈な違和感から次の一枚は衒いを抑えて簡素に書いた。この方がいいと確信して、また二、三枚書いた。残したのはその時の一枚である。その後さらに十枚近く書いたが、結局、残すものは変わらなかった。翌日、筆を取り換えて書いてみようかとも思ったが、他の作に臨んでいるうちに、その思いも失せた。

紙は厚口金龍、半切を八等分した。墨は磨墨液抱雲。筆は仿古堂の翠象（小）だが、裏打後に眺めてみて、筆を取り換えておけばよかったかと、やや反省した。印は朱文「雅弘」。二〇〇八年に刻してもらったものだが、機会がなく始めてこれに鈐した。

里
仁

16.9×34.7㎝